

# Dennett meets Strawson

梶本 尚敏

京都大学

責任論の主要な論争点の一つに、「決定論と道徳的責任は両立可能か？」というものがある。非両立論者は、もし決定論が真であるなら、道徳的責任は非合理的なものとして排除されると主張する。これに対し、両立論者の多くは、決定論と両立可能な道徳的責任の概念を提示することで答えを与えようとしてきた。しかしながら、この論点に対し、全く異なるアプローチを試みた論者がいる。それがピーター・ストローソン(P.F. Strawson 1962)である。

ストローソンはまず、怒りや尊敬などの“反応的態度”に注目する。日常生活において、私たちは他人に対して様々な反応的態度を抱く。これらの反応的態度は人間の本性に深く根付いたものであり、それゆえ決定論が真であったとしても放棄されえない。このように主張したうえで、ストローソンは道徳的責任も同様に人間の社会の根源に深く根付いたものであり、それゆえ決定論が真であっても放棄されえないと結論する。つまり、決定論と道徳的責任は無関係であり、そもそも同じ土俵で争われるべき問題ではないのだ。

ストローソンのアプローチは独創的なものであり、後の論争に多大な影響を与えてきた。しかしながら、彼のアプローチは様々な問題を抱えている。特に問題なのは、「なぜ人間の共同体が道徳責任を必要とするようなあり方をしているのか」に関してストローソンが説明を与えていないという点である。道徳的責任が人間の社会の根源に深く根ざしたものであるという想定は、ストローソンの議論において重要な役割を果たしている。それゆえ、もしストローソンのアプローチを採用しようとするなら、先の問いに答える必要があるだろう。

この「なぜ人間の共同体が道徳責任を必要とするようなあり方をしているのか」という問題に対し、ダニエル・デネットは著書『自由は進化する』において、自然主義的な立場から興味深い答えを与えている。一般的に、ダーウィン主義は自然淘汰を正当化する思想であり、それゆえ倫理的な希望を台無しにすると考えられている。しかしながら、デネットに言わせれば『これは全くの誤解である』(Dennett,2003)。むしろ、愛他性や他人と協力する傾向は、進化の過程の中で生み出される。このように、彼は道徳的責任がどのように発展するのかという問題に対し、進化論に基づく説明を与えた。本発表では、このデネットのアプローチを足掛かりにしつつ、ストローソンが答えていなかった先の問題に取り組む。この考察により、ストローソンのより良い理解に貢献したい。